

# 傳教の圓頓戒に就て

鹽田義遜

## 緒言

### 第一、支那天台の圓戒

- 一、南岳の圓戒
- 二、天台の圓戒
- 三、天台の戒体
- 四、圓の三學
- 五、湛然明曠の圓戒

### 第二、傳教以前の菩薩戒

- 一、大福律師と白塔僧統

### 第三、傳教の圓頓戒

- 二、自然智道瓊
  - 三、行表と鑒真隨來
  - 四、鑒真將來の章疏
  - 五、戒壇と鑒真の授戒
  - 六、法進の戒疏と教學
- 一、顯戒論の内容
  - 二、佛性一乘戒

## 緒言

由來傳教は圓頓の大戒壇を叡山に建立して、法華に依る眞俗一貫の菩薩道を以て、佛教に依る大政翼贊を根本主張とせられたことはいふまでもない。併し乍らその圓頓戒なるものゝ内容に至ては、果して法華なりや、梵網なりや相等討究の餘地があるのである。

翻て考ふるに佛教の教義は、阿含以來戒定慧の三學を以てし、大乘中菩薩乘教の六度乃至十度も矢張に三學に外ならぬし、更に佛乘教ともいふべき眞言の三密、法華中天台の迹門三學、本門の三秘何れも三學を以て教義を構成する

内容として居るのである。随つて印度に於て成立せる經律論の三藏を以て、三學能詮の佛典と見るに至つたのであるが、その所詮ともいふべき三學の構成は支那佛教の根本問題であつた。併し三學中定慧の二學は比較的早く發達し就中慧學に立つ三論、四論、地論、攝論、華嚴の如きがあり、定慧二學に立つ天台止觀宗は早く出現したが、戒學のみは法顯三藏入竺に見るも、早くより教界に曉望されたのにも拘らず、天台慧思以後道宣慧思の四分律宗の獨立に依り漸く定慧二學と俱に佛教學の水平線上に見らるゝに至つたのであつた。

宗祖も「聖密房御書」に「宗と申すは三學を備へたる物なり」六二六と宣はれし如く、三學は佛教の行法構成の要素であるが、その發達に遲速があつたことが、三學構成の上にも結果して、天台の如きは圓の三學を唱へつゝも、三學中定慧の二學たる止觀の乘を正意として、戒を傍としたことは、止觀を以て章安が天台の『說已心中所行法門』と述べたるに徴しても明かである。而して天台の後に道宣に依て戒が佛教學の重要な一部を占むるに至つた故に、傳教に依りて圓頓戒の問題が起るに至つたのである。これ宗祖が遺文中隨所に「天台は圓定圓慧を弘め未だ圓戒は弘めず、傳教は天台の弘め殘せる圓戒を弘め、叡山に圓頓戒壇を立つ」と述べらるゝ所以である。かくの如き歴史上の事實よりするも、又「顯戒論」等の記述から見ると、傳教の圓頓戒なるものゝ内容を吟味しなければならぬ。

## 第一 支那天台の圓戒

### 一、南岳の圓戒

傳教の教學は所謂四個傳法といはれて、その中密教を除いた圓禪戒の三つは、次の如く慧定戒の三學に外ならぬのである。且つ此の三學は傳教入唐以前より、圓の三學として統一組織せんとしたことは、「顯戒論」等に依ても明かである。

あり、殊に弟子光定の「一心戒文」に依れば、愈その事實を明にするのである。十二歳の時行表に就て出家した傳教は、入唐前行表より道瓊相承の神秀を祖とする北宗禪を傳へ、後鑑眞將來の天台三大部並に起信論を修得し、入唐して後圓教を遂滿二師より相承し、道邃より更に圓戒を相承して歸朝したのである。勿論密教の相承もあつたが今は且くこれを措き、若し今の問題たる圓頓戒に就ては、「内證佛法血脈譜」に依れば、蓮華藏世界の盧舍那佛を教主とし、

盧舍那佛

逸多菩薩—天竺羅什

南岳慧思—天台智者—章安—智威—慧威—玄朗—湛然—道邃

靈山聽衆

最澄—義眞

右の如く、天台に於ても盧舍那佛を起源とする圓戒が存する故に、少なくとも南岳天台の圓戒を知らねばならぬ。

先づ「續高僧傳」十七の南岳傳に依るに、『及稟具足道志彌隆』とあり、更に夢中數百の梵僧より『汝先受戒律儀非勝』の警告あり、又『加錫磨法具足成就』と記し、『行大慈悲奉菩薩戒……定慧雙開』(「正藏」五〇<sub>三五</sub>)等とあるも、傳中戒に關する著作は見えないのである。然るに傳教は「台州錄」には「受菩薩戒文」一卷(「全集」四<sub>四六</sub>)を傳へ、又「日本續藏」には南岳述の「受菩薩戒儀」一卷(二二〇)が傳へられ、更に「佛教全書」の智證の「授菩薩戒儀裏書」の末文には、正しく今の文を引用して『此文出南岳大師戒儀』(二六六)とある。併し此文は「大正藏」所收の同書の裏書の中にはない。然るに右の戒儀は既にその内容から、五代以後のものとして推定せられ、境野博士の如きも「戒儀」の通授は梵網に依り乍ら、三聚並に十無盡戒は瓔珞に依り、又十戒の次第は梵網瓔珞等の流布本と異り、第六の自讚毀他を第九とし、又前六を道俗三乘通受、後二を純出家戒となし、又三歸に常住の語なきのみならず、六祖の「戒儀」が十二門戒に依るに拘らず、十四段に分ち且つ、その組織非常に煩雜である。殊に請戒師の下の文に

欲求戒法者先發信心、信心若成三學具足、三身四智佛果菩提決定可期更無疑慮、故華嚴經云「信爲道源功

德母<sup>一</sup>、長<sup>三</sup>養一切諸善根<sup>一</sup>、斷<sup>三</sup>除疑網<sup>一</sup>出<sup>三</sup>愛河<sup>一</sup>、開<sup>三</sup>示涅槃無上道<sup>一</sup>」

と三學一信を高潮する點、天台、妙樂の疏中に全く見ざる所である。果せる哉信心の引證たる華嚴の賢首品の文は、南岳<sup>五七七</sup>の寂後實又難陀譯出(六九九)の新譯八十華嚴の文である。隨つて續藏本の「受苦薩戒儀」は、南岳本でないことは最早議論の餘地はない。これ既に久野氏も「圓頓戒源流論」(「宗研」九、一三九)にも指摘せる所である。されば南岳に於ける圓戒の内容に就ては、傳教等の相承説が存するがその内容は判然しないのである。

## 二、天台の圓戒

然るに若し天台に至つては夙に大乘戒たる梵網を註し、又三大部中「地持」「瓔珞」等の大乘戒のみならず、「十誦」「薩婆多」等の小乘律を始め「大論」「涅槃」等經論に見ゆる大乘戒を引用し、通じて三學を以て教學の内容となし、「文句」一には

修行以<sup>二</sup>戒初定中慧後<sup>一</sup>、若法門以<sup>レ</sup>慧爲<sup>レ</sup>本定戒爲<sup>レ</sup>迹。又戒定慧各作<sup>三</sup>三分<sup>一</sup>。(三七)

と三學を以て教學内容とするも、三學中定慧を正とし戒を傍とする、所謂乘急戒緩の弘通にあつたのである。即ち定慧の止觀を以て所行法門となし、戒は自ら第二義的方便の位置に置かれたのである。されば終窮究竟の極説たる「摩訶止觀」には、定慧の止觀を正觀となし、戒を廿五方便に攝しその五科の最初具五緣の第一に持戒清淨として列し、舊醫を始め小乘三歸五戒二百五十戒等を客戒となし律儀戒となすに對して、「大論」「涅槃」等の十戒を乘戒に二分し、更に薩婆多の三種戒に約するも、「止觀」には正しく乘正戒傍即ち乘急戒緩の意に立つて諸戒を判じて

前來諸戒律儀防止故名<sup>二</sup>不具足<sup>一</sup>、中道之戒無<sup>レ</sup>戒不<sup>レ</sup>備故名<sup>二</sup>具足<sup>一</sup>、此<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>持<sup>三</sup>中道第一義諦戒<sup>一</sup>也。用<sup>二</sup>中道慧<sup>一</sup>偏

入諸法、故經云式叉、式叉名大乘戒也(四、一七)

と一往諸戒を不具足、中道第一義戒を具足戒と判するも、再往小乗の式叉摩尼を大乘戒と判するは、妙樂が「輔行」に  
 又名「開權、今並開之成摩訶衍」乃至當知戒無大小一由受者心期(同上八)

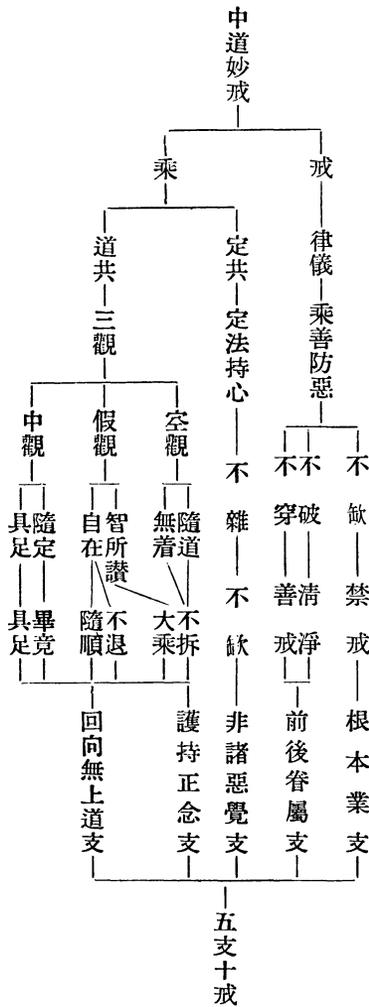
と釋せる如く、天台は法華開會の意に依て大小併用したのである。更に「止觀」には中道第一義戒を説いて

如是觀心、防止二邊無明諸惡善順中道一實之理、防邊論止順邊論觀、此名即中而持兩戒也。故梵網云戒

名大乘、名第一義光非青黃赤白、乃至當知中道妙觀戒之正體。(四、一左)

と梵網を引いて中道妙觀を以て圓の戒體となしたのである。今「玄義」(三上四四)「止觀」(四、一左、四、二初)等の意に依  
 て、一家の中道妙戒と「涅槃」「大論」等の大戒との關係を示さば左の如くである。

(三種戒) (大論) (涅槃)



斯く天台開會の意に依て薩婆多の三種戒を用ゐ、三大部中大乘三聚の明文は無いが、「止觀」四に

小乘明レ義無作戒、即是第三聚、大乘中法鼓經但明ニ色心一無第三聚、心無盡故戒亦無盡、若就ニ律儀戒一論ニ無作一可レ解（四ノ一方）

とあるは、正しく「瓔珞經」の『一切菩薩聖凡戒盡以レ心爲レ體、心無盡故戒亦無盡』（「正藏」二四三）の文に依れることは明で、隨つて三大部中の諸戒は小乗のみならず、「梵網」「瓔珞」等の大乗戒に依れることも明かである。

若し天台の「菩薩戒疏」に至つては、薩婆多の三種戒を出し、今の菩薩戒にも此の三名ありとなして、「方等地持」を指して居るが、これは「瑜伽論」の同本異譯たる曇無讖（三三五）の「菩薩地持經」十卷のことである。更に「瓔珞」の三聚の文を出して大乘の三聚を明かにし、次で「大論」「涅槃」の十戒を出して居るが、此の「戒疏」の大論の十戒以下の記述は、文に一二字の相違はあれ、「止觀」四の記述と全同である。但「戒疏」は『用ニ中道慧一遍ニ入諸法一』の八字の理由で『故名ニ具足一』と上に理由を冠らせ、「止觀」は八字を第一義戒の下に連ねて、『故經云ニ式又一、式又名ニ大乘戒一也』と開會の説をなして居るのである。

前述の如く「止觀」は天台の究竟の説であり、所行の法門であり、且つ五十七歳晩年に近い開皇十四年、郷土の恩を報ずるため荊州玉泉寺に於ける一夏九旬の説である。然るに「戒疏」の述作年次は不明であるが、「大師別傳」並に「國情百錄」（「正藏」五〇（一九）、四六（〇））に依るに、陳の至德四年（五八六）一月十五日五十歳の時、天台は陳少主に菩薩戒を授け、重ねて隋の文帝の開皇十一歲（五九一）十一月二十三日五十五歳の時、晋王煬廣即ち煬帝に菩薩戒を授けたことは明かである。就中「別傳」には

既值ニ便風一朝發夕還、而諸官道俗延頸候望、扶レ老携レ幼相趨ニ戒場一、垂黑戴白雲屯、講座聽衆五十餘人。（「正藏」五

と記し、「百録」二の王受菩薩戒疏廿六には

天台智顛禪師佛法龍象、童真出家戒珠圓淨、年將耳順定水淵澄、因靜發慧安無礙辯。乃至敬屈禪師授菩薩戒、戒名爲孝亦名制止。(「正藏」四六<sub>三</sub>)

とあるに徴して、「戒疏」は此の時の章安の筆録であらう。且つ「止觀」は法華に依る一家の行法で、「玄義」は廣く五重玄に約して説くも、「戒疏」は『釋』此戒經「三重玄義」と述べて、釋名、出體、料簡の三重に約せるは、宗とする究竟の説たる「三大部」に對すれば略解であり一縁のための説であるからであらう。随つて「三大部」と「戒疏」とは共に大師の説ではあるが、「三大部」は法華開會に立ちて乘急戒緩の圓の三學を明し、「戒疏」は大乗當分に立つて「梵網」を解するに「瓔珞」「地持」の三聚に依て、大乘三聚の源をなして居る。これ一家の戒法に左右する所以である。

### 三、天台の戒體

前述の如く「三大部」に於ける圓の戒體は、既に『中道妙觀戒之正體』と釋せる如く、中道實相を以て戒體とするが「戒疏」は梵網に依てその戒體を明して

戒體者不起而已、起即性無作假色、經論互說諍論有無、一云都無無作、色心假合共成衆主、善惡本由心起、不應別有頂善頂惡、皆是指心、誓不爲惡即名受戒、瓔珞經云一切聖凡戒盡以心爲體、心無盡故戒亦無盡、或言教爲戒體、或云眞諦爲戒體、或云願爲戒體、無別無作。(「正藏」四六<sub>三</sub>)

と説いて無作の假色を以て戒體と説くのである。されば古來一家の戒體に就て種々の説をなし、淨覺は當體と所依

〔戒疏集註〕一、<sup>四</sup>とを以て之を分ち、澤山と竹菴とは能發と所發（〔戒疏註〕一、<sup>三六</sup>、「山家義苑下」<sup>二〇</sup>）との別となし、「私記」は教と理（〔止觀私記〕四、<sup>四</sup>）とを以て之を判じ、幻々和尚は『止觀約二大小相對、戒疏且約二開顯』』（〔戒疏集註〕<sup>二五</sup>）とすひ、「二百題」十三には『色心俱可レ有二其義也』』（冠導本）<sup>五七</sup>と判じ、近代慧澄は「止觀講義」に梵網の第一義光を解して

即所レ放光則以三全レ性發二斯光色一、全三斯戒光一無レ非二性德戒体一、故名三第一義光一、性德則圓離二諸相一、所三以非二青黃等一也。既全三性德一發二斯戒光一、則斯戒光祇是法性寂而常照之德。即與三全レ性之觀一不レ異、是故結二歸妙之心觀一、以爲二上品清淨究竟戒体一。意顯下因果不二、色心体一、修性一如、方爲中大乘圓妙戒体上。此是正約二理觀一、似下與二常途一稍異上、如二常途一者約二義分三別修性一、全レ性之修爲二戒之當体一。不論二二相一、今家意者戒体涉二色心一爰彌顯矣（四、<sup>四</sup>）

と解し、大實律師は「玄義講述」に

無作戒体藉二身口意作業一而所レ發也。能發之具既亘二色心一、所發戒体爲レ色爲レ心、俱可レ有二其義也。（三下、<sup>四</sup>）

等と釋せる如く、「戒疏」と「止觀」の戒体を以て、教理の別、大小開顯の異と判ずるは、蓋し一往文に執する說である。併し古來當体と所依、能發と所發と分ち、又近代「二百題」以後の三說に至つて、これ中道又は實相戒体に依る異語同義である。故に「玄義」八には法華の經体を出して、『正顯レ体者即二實相印也』』（八上、<sup>三五</sup>）といひ、又「正指二實相一以爲二正体一也』」（一、上、<sup>二〇</sup>）と述べ、且つ次下に佛所見の實相を取るといへるは、正しく法華の經体であると共に、一家の戒体である。

かくの如く一家の戒体は實相であり中道であるが、若しこれに對して色心の解をなすは、不二一如の絶待より下れ

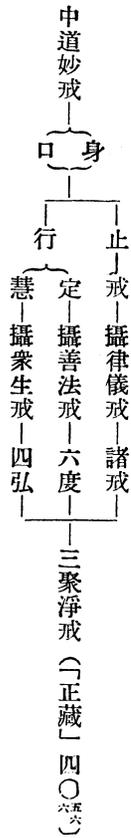
る、所謂第二義門に約すからである。而して第二義門とは大乘當分の解で、「戒疏」に『起即性無作假色』とは此の解に近いのである。若し此の解を三學の上に就て見るならば、一家の根本立脚は三學一元に立つ故に、分修或は次第の三學を以て權小の三學となし、三一三不縱不横の三學を以て、法華圓教の三學となし、「玄義」三には涅槃の五行の中その根元たる聖行を以て三學となし。(三下<sup>五</sup>)『扶<sup>三</sup>戒定慧顯<sup>三</sup>大涅槃<sup>二</sup>』(同上、四下<sup>左</sup>)とは正しく此の意である。

天台の教學は三學を以て組織内容として居るのであるが、屢述べたる如くその正行たる止觀は、前掲「文句」の三學二種次第の中法門の次第たる慧定戒に依らず、修行の次第たる戒定慧の次第に依り、戒初は方便、定慧俱運の止觀を以て正觀となすのである。されば肉兄陳鍼のために執筆せる「小止觀」には

止是禪定之勝因、觀是智慧之由藉、若人成<sup>三</sup>就定慧<sup>二</sup>法<sup>一</sup>、斯乃自利利他法皆具足。(「正藏」四六<sup>四六</sup>)  
と述べ、「止觀」に圓頓止觀を説いて

純一實相實相外更無<sup>三</sup>別法<sup>一</sup>、法性寂然名<sup>レ</sup>止、寂而常照名<sup>レ</sup>觀、雖<sup>レ</sup>言<sup>三</sup>初後<sup>二</sup>無<sup>レ</sup>二無<sup>レ</sup>別、是名<sup>三</sup>圓頓止觀。(一<sup>一</sup>二<sup>二</sup>)  
と述べ、定慧の次第に依る漸次止觀、並に前後淺深頓漸定らざる不定止觀に簡んで、實相の寂照定慧<sup>二</sup>法無<sup>レ</sup>二無<sup>レ</sup>別の止觀を以て、一家圓頓の行法としたのである。されば天台の行法は法門の組織内容からすれば、三學を以てするのであるが、三學中且らく傍正を分つて、戒傍定慧止の所謂乘急戒緩の弘通である。これ宗祖が天台の弘通を指して『圓定圓慧を弘めて圓戒は未だ弘めず』<sup>九三六</sup>と指摘せる所以である。

かく天台の止觀は定慧俱運の行法といふも、既に法門の次第は慧定戒といへる如く、中道の妙慧を以て根本とする圓の三學といふべきである。故に「戒疏」に菩薩戒を説くにも、中道正觀心中發得の無作の假色を以て戒体となし、身口に依る止惡修善に寄せて、圓戒の三聚を判じて居る。



又「三大部」中圓頓の三聚淨戒の名文はないが、「玄義」六に涅槃の五支戒を引き、最後の廻向具足無上戒を釋して是菩薩於諸戒中、具四弘六度發願要心、廻向菩提故名大乘戒。(三下四六)  
 とは「戒疏」の大乘戒に寄せて圓の三聚を説いたものである。

#### 四、圓の三學

然らば天台の法門的立脚とする三學一元、圓頓三學の思想は天台の獨創なりや、將又南岳の相承なりやといふに、章安は「止觀」の序に天台の三種止觀を以て

天台傳三南岳三種、乃至本是大乘俱緣實相同名止觀。(一ノ一五六)

と述べて南岳相承説をなし、又「續高僧傳」十七の南岳傳に見ゆる、天台が南岳會下に於ける般若法華代講の時、般若の「一心具萬行」の文に對する凝疑の顛末を記して

思爲釋曰、汝向所疑此乃大品次第耳、未是法華圓頓旨也。吾昔夏中苦節思此、後夜一念頓發諸法、吾既身證不勞致疑、顛即證受法華行法。(「正藏」五〇五六)

とあるに徴すれば、法華圓頓の義は南岳相承と言ひ得るのである。而して南岳の著述中に之を求むるに、「法華安樂行儀」の卷頭に

法華經者大乘頓覺、無帥自悟疾成佛道、一切世間難信法門、凡是一切新學菩薩、欲求大乘超過一切諸菩薩疾成佛道、須持戒忍耐精進勤修禪定、專心勸學法華三昧。〔正藏〕四六六

とある如く、「安樂行儀」は六度に依て定を中心として四安樂行を説き、經文に「如實相、如虛空」とあるに依て、空諦實相の頓覺を以て法華圓頓の意と解したもので、六度の行法は見ゆるが三學の語は見へない。故に若し判然たる三學の文としては、「國清百録」一に收むる天台の「普禮法」に見ゆる虛空不動の三學の文である。

若し此の「普禮法」の文に依れば、「七處九會圓滿頓教盧舍那佛」とある故に、華嚴に依つたことは明かである。又天台が華嚴に通ぜしことは三大部に依て明かである。今先づ「普禮法」の文を出さば

普禮十方三世諸佛七處九會圓滿頓教盧舍那佛、普禮十方三世虛空不動戒藏盧舍那佛、普禮十方三世諸佛虛空不動定藏盧舍那佛、普禮十方三世諸佛虛空不動慧藏盧舍那佛。〔正藏〕四六五

と説ける文で、これ圓頓三學の思想の天台にあつた左證である。併し此處に疑問となるは果して華嚴に據つたとするも、七處九會は天台(五九七)寂後質實又難陀譯出(六九九)の新譯八十華嚴の所説で、若し華嚴に據つたとすれば、佛駄跋陀羅譯の舊譯六十華嚴でなくてはならない、然るに普禮の文は第八普光明殿會を缺く故に、正しく七處八會で隨つて七處九會とあるは誤である。若し然らざれば普光會を缺き、且つ「普禮法」は天台作で無いことになるのである。茲に於て尙ほ疑問となることは、「普禮法」が果して華嚴に據りしや否やであるが、他に七處八會以外に普禮を説いた文として、求那跋摩(四三六)譯の「優婆塞五戒威儀經」がある。即ち

歸命敬禮七處八會盧那舍佛、盡十方國諸妙覺尊、乃至歸命敬禮七處八會佛華嚴藏、盡十方國修多羅海、歸命敬禮七處八會普賢衆等、盡十方國諸賢聖僧。〔正藏〕二四二〇

とあるに徴するに、恐らく天台は此文に據つて「普禮法」を作つたのであらう。「普禮法」は先づ寂滅道場、普光法堂、忉利天、炎摩天、兜率天、他化自在天、重會普光法堂、祇洹林の七處八會の盧舍那佛の普禮を擧げ、次で虚空不動三學藏盧舍那佛の普禮を列ね、最後三歸三寶を列ね、最後願諸衆生三業清淨の三寶を以て結んで居る。

かく「普禮法」は且く「優婆塞五戒經」並に「華嚴」に依るとするも、若し虚空不動の語に至つては、これ「法華」安樂行品の

在於閑處、修攝其心、安住不動、如須彌山、觀一切法、皆無所有、猶如虚空、無有堅固。  
の文より出で、更に南岳の「安樂行儀」の

法會處中觀一切法、若善法、若不善法、若無記法、皆如虚空不可選擇、於諸法中畢竟心不動、亦無住相得不動三昧。(「正藏」四六七。)

の思想に由來するものであり、隨つて天台の止觀は安樂行品の實相觀の具說に外ならぬのである。これ一家が法華の四要品に安樂行品を加へ、且つ法華圓頓の義の南岳相承を募る所以であらう。

### 五、湛然明曠の圓戒

以上は南岳天台に於ける圓戒であるが、天台に於ても戒は三學の一であるといふのみであり、且つ當時未だ戒律が佛敎學の重要たる一要素と見做されなかつた故に、定慧の止觀正意の弘通であり、隨つて三學の内容をなすに過ぎなかつたのである。然るに六祖湛然の頃に至つては道宣に依て戒を中心とする三學説が唱へられ、湛然の「授菩薩戒儀」一卷も傳へられ、傳敎の「台州錄」にも『受菩薩戒文、一卷、荊溪和尚撰、一十紙』(「全集」四四九)として將來せられ

て居る。而して此の卷頭に『依古德及梵網瓔珞地持並高昌等文』とあるに依れば、天台の「戒疏」に掲ぐる六本中、右の四本の外新撰本、制旨本の二本を古德の本とし、是等を綜合して開導、三歸、請師、懺悔、發心、問遮、授戒、證明、現相、說相、廣願、勸持の十二門としたる、所謂十二門戒としたものであらう。最初の開導の下には

佛法大海深廣無崖唯信能入、由有信故三學可成菩提可至、故三學中以戒爲首、菩提廣路戒爲資糧、生死大海戒爲船、三途重病戒爲良藥。(佛全二四九三)

と天台三學修行の次第の意に依り、戒を以て三學の能入の門とするも、

以下戒品具足三聚、三聚徧收中一切法上故、

と説き、且つ小乘に三聚の名はあるも、五八十具の戒法は人天無餘涅槃を目的とし、大乘の菩薩律儀は無上菩提の佛果を目的とし、又西方彌陀淨土に往生し、無生忍を得、且つ一切衆生悉期成佛を以て所期とすとなすこと、全く「止觀」に於ける圓戒の意を出でぬのである。併し十二門に組織せられたることは注意すべきである。

妙樂に次では明曠の「菩薩戒疏」二卷がある、明曠は「佛祖統紀」十(「正藏」四九三)には草安の弟子として居るが、「金錘論記」の著者と同じく妙樂の門人である。而してその「天台菩薩戒疏」は先づ、名体、宗用、教攝、受法、傳譯、料簡、隨文解釋の七門に分つて菩薩戒を註し、就中最初名体の下の出体に於ては、戒体に色心と實相心との二種を擧げ、前者は初發、後者は成就の相違となすが、要するに「戒疏」と「止觀」との別と見るべきである。次の教攝の下に於ては四教と五時に經て、梵網と法華の相違を説いて

今此戒經結華嚴會、即別圓教輕重頓制菩薩律儀、法華正明佛意開權歸實唯一圓乘、人法俱開依正無二。(正

藏「四〇五六)

と述べて、梵網は華嚴の結經なる故に兼別の圓の菩薩戒、法華は開權顯實唯圓の佛戒なりと五時に寄せてその別を分つて居り、これ先に戒体を色心と實相とに分つたのと同意である。若し第四受法の下に於ては、妙樂の「戒儀」と同じく瓔珞地持高昌の諸本に依り、且つ十二門戒に分つた點は湛然に依つたのであらうか、第六料簡に於ては圓教無作の戒体を實相心となし、更に通教利根の被接の圓接の義に依り、華嚴の結經たる梵網を法華圓頓の戒とし、圓頓菩薩戒佛性戒、圓教頓制の戒と解したのである。故に最初名体の下に於ては『大而言之不出四弘三聚』と解し、料簡の下に於ては實相心を戒体となすのみならず、

制教所<sub>レ</sub>明從<sub>三</sub>禁<sub>レ</sub>惡邊<sub>二</sub>而得<sub>三</sub>戒名<sub>一</sub>、化教所<sub>レ</sub>明從<sub>三</sub>修禪學慧<sub>二</sub>而立<sub>三</sub>乘稱<sub>一</sub>、此則別也。若其通者三學相須如<sub>三</sub>自足<sub>一</sub>。並能運<sub>三</sub>載所趣之處<sub>二</sub>通得<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>乘、並有<sub>三</sub>斷惡之能<sub>二</sub>十總名<sub>レ</sub>戒、今菩薩戒三義互通、從<sub>レ</sub>制<sub>三</sub>止惡<sub>二</sub>名<sub>レ</sub>之爲<sub>レ</sub>戒、從<sub>レ</sub>制<sub>三</sub>起行<sub>二</sub>常住慈悲則是乘也。故一々戒乘戒具足、戒即法身、乘即般若、乘戒不二慈悲應化即是解脫、解脫德假觀爲<sub>レ</sub>因應身爲<sub>レ</sub>果、般若德空觀爲<sub>レ</sub>因報身爲<sub>レ</sub>果、法身德中觀爲<sub>レ</sub>因法身爲<sub>レ</sub>果、故知戒々三聚互融、三觀三身相即、三聚三身既無<sub>二</sub>優劣<sub>一</sub>、四十八輕十重等持<sub>三</sub>心性<sub>二</sub>寧有<sub>三</sub>淺深<sub>一</sub>、假分<sub>三</sub>乘戒兩名<sub>一</sub>、一々無<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>互相<sub>一</sub>と正しく天台の圓融三諦の解を以て梵網を釋したのである。

(四弘) (三觀因) (三身果)



かくの如く明曠の菩薩戒觀は、台荆兩祖の當分解釋より一步進出して、乘戒一致の法華圓頓に立脚して之を解し、

一心三觀の止觀行法を以て直ちに四弘三聚の圓頓一乘戒を説いたのである。

其の他梵網には元照の「授大乘菩薩戒儀」、並に遵式の「授菩薩戒儀」各一卷があり、前者は天台と華嚴と道宣の戒學を調和し、開導、證明、三歸、發願、懺悔、請師、問遮、授戒、現相、發願の十科に分つか、後者も次第を異にする十科に分つと述べて居るが、上述の所謂南岳本なるもの十四科は右十科に類似し且つ煩雜であり、隨つて梁陳時代の南岳でなく、五代以後或は大元時代の作と迺いはれてゐる。若し傳教「台州錄」の南岳説の受菩薩戒文一卷七紙〔全集〕四<sup>四五</sup>は、現行の南岳本以外のもので今は不明である。尙ほ梵網には唐の法藏の「本疏」六卷、新羅の義寂の「本疏」太賢の「古述記」各三卷、〔正藏〕四〇所收〕等があり、共に傳教の「顯戒論」に引用せられて居るが、天台の圓戒としては明曠を以て支那に於ける結論と見るべきであらう。

## 第二 傳教以前の菩薩戒

### 一、大福律師と白塔僧統

次に正しく傳教の圓頓戒に就て述べんとするのであるが、「血脈譜」に依れば六祖湛然の後、道邃を経て之を相承して居るのである。而して戒律に關する傳教の著としては、「顯戒論」三卷の外に「授菩薩戒儀」一卷〔全集〕四<sup>四〇</sup>があるが、内容より見れば「小部集」に攝むる、湛然の「十二門戒」と全同である、隨つてこれは恐らく傳教將來のものであらう。然るに傳教には入唐前に天台の圓教と共に圓戒の相承を認めねばならぬ。即ち凝然の「傳通緣起」に依れば、傳教の著と稱する「天台付法緣起」の文として

大福律師先入三和國、乃傳三圓明、利三益有情。白塔僧統後遊三日本、復傳三圓義、開三佛知見、所以大安唐律注三戒經

於比蘇<sup>一</sup>、東大僧統注<sup>二</sup>梵網於唐院<sup>一</sup>、兩聖用心弘<sup>三</sup>天台義<sup>一</sup>、群生同欽<sup>三</sup>天上甘露<sup>一</sup>。(佛全<sup>一</sup>二〇一六)

右の文を引用して居るが、此書は現在しないのである、修禪院和尚の「傳教大師御撰述目錄」に

天台法華宗付法緣起、卷上<sup>三</sup>、卷中<sup>三</sup>、卷下<sup>三</sup>。(「全集別卷」<sup>一</sup>)

と記するに徴して曾て存在したことは明かである。

右の文中「大福大安の律師」とはこれ傳教習禪の行表の師たる道瑯である。道瑯は天平八年三十歲來朝前、洛陽大福先寺に於て定賓より具足戒を受け律を學び、又神秀の弟子普寂より禪と華嚴を受け、開元廿一年我が榮叡普照の請に依て來朝し大安寺西唐院に在て「梵網」並に「四分行事鈔」を講じ、天平十五年三月興福寺北倉院に於て行表に具足戒を授け、更に大安寺に於て傳教に禪法を傳へた。かくて鑑真來朝するや晚年吉野の比蘇寺に於て「注梵網」三卷を著し、天平寶字四年五十九歲にして入寂したのである。又「白塔東大の僧統」とは鑑真の一門を指したのである。即ち鑑真は十九歳の時道岸より菩薩戒を受け、更に道宣の法孫弘景より具足戒を受け、又融濟に南山鈔を學び、義威智全より「法礪疏」を稟け、我榮叡等の請を容れ天平勝寶六年六十六歲にして、天台の教籍を携へ法進等を率ゐて來朝し、南都東大寺に於て菩薩戒を授け、後唐招提寺に戒壇を建て七十六歲にして寂した。後弟子法進は台學と律に長じ、白塔寺に在て律を弘め鑑真來朝するや、師を扶けて台律を講じ、師に代つて戒和上となり戒壇院を管し、唐禪院に在て「梵網經鈔」六卷を出し、又衆の請に依て四度三大部を講じ、寶龜九年八十一歲にして寂した。又思託は自ら天台沙門と號し、曇靜如實等何れも天台に通じた。隨つて傳教入唐前の圓教並に梵網は全く、道瑯、鑑真の一統よりの相傳である。これ「付法緣起」に『兩聖用心……天上甘露』と述ぶる所以である。

更に如上の事實を他の傳教の著述中に徴すれば、弘仁七年立教開宗の宣言書と呼べる「依憑天台宗」の序に、新來

の眞言、舊到の華嚴、沈空の三論、著有の法相と、所謂傳教の四個格言を以て當時の諸宗を批判し終つて

寂澄南唐之後稟<sub>三</sub>此一宗、東唐之訓聞<sub>三</sub>彼戒疏<sub>二</sub>、拾<sub>三</sub>圓珠於海西<sub>一</sub>、獻<sub>三</sub>連城於海東<sub>一</sub>、略示<sub>三</sub>菽麥之殊<sub>一</sub>、悟<sub>三</sub>目珠之別<sub>一</sub>。〔全集〕<sub>(二五六)</sub>

と述ぶるは、文意計り難いが恐らく道璿の「注梵網」に依て、圓の三學を彷彿と解し、入唐求法して湛然發揮の教學を傳へて、いよゝその内容を明にしたといふのであらう。故に其末文に

吁乎實哉生知者上、學知者次此言有以也。不<sub>レ</sub>出<sub>三</sub>庭戶<sub>一</sub>天下可知豈空傳哉。此間在<sub>三</sub>比蘇<sub>一</sub>大唐聞<sub>三</sub>天台<sub>一</sub>、今吾大師雖<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>逐<sub>三</sub>杖於葱嶺<sub>一</sub>、然靈山之聽恒存<sub>三</sub>心腑<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>負<sub>三</sub>經於流沙<sub>一</sub>、而南岳之告篤載<sub>三</sub>簡牘<sub>一</sub>、(同上)

と比蘇の道璿と天台の智顛を以て共に生知の大聖と判じ、且つ道璿は天台に稟け、天台は南岳に圓の三學を稟けたことは、「國請百錄」の普禮の三學から知ることが出来る。隨つて圓の三學は源を南岳に發することは、全く「血脈譜」と符合するものである。其の他「顯戒論」中には南都の僧統が、傳教の入唐を貶評して『最澄只在<sub>三</sub>邊州<sub>一</sub>即便還來』といへるに對し、道璿の「梵網」大戒を讚歎して

未<sub>レ</sub>見<sub>三</sub>邊州<sub>一</sub>不忠之詞、若嫌<sub>三</sub>邊州闕學失<sub>一</sub>、何況比蘇自然智也、(全集)一<sub>(九六)</sub>

と矢張自然智と稱し、「法華秀句」上末〔全集〕<sub>(二七六)</sub>にも同様の讚辭が見られるのである。これ「譬喩品」の『一切智佛智、自然智、無師智』の文に依るもので、今の自然智とは通じては圓の三學の意であり、別しては菩薩大戒を意味するのである。

此の外傳教の「血脈譜」に依れば、入唐前の行表所傳の禪法相承を明かにし、達磨、慧可、僧璨、道信、弘忍、大通<sub>禪師</sub>、普寂、道璿、行表の次第を示し、太宰府の吉備眞備の纂を引いて

大唐道瑯和上天平八歲至<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>大唐<sub>一</sub>、戒行絕倫教誘不<sub>レ</sub>怠、至<sub>二</sub>天平勝寶三歲<sub>一</sub>、聖朝請爲<sub>二</sub>律師<sub>一</sub>、俄而以<sub>レ</sub>疾退<sub>二</sub>居比蘇山寺<sub>一</sub>、常自言曰遠尋<sub>下</sub>聖人所<sub>二</sub>以成<sub>レ</sub>聖者<sub>上</sub>、必由<sub>二</sub>持<sub>レ</sub>戒以<sub>レ</sub>次漸登<sub>一</sub>。和尙每誦<sub>二</sub>梵網之文<sub>一</sub>、其謹誦之聲零々可<sub>レ</sub>聽、如玉如<sub>レ</sub>金發<sub>二</sub>人善心<sub>一</sub>、吟味幽微律藏細密禪法玄深、遂集<sub>二</sub>註菩薩戒經<sub>一</sub>三卷、非<sub>二</sub>我輩之所<sub>レ</sub>逮、更何得<sub>二</sub>稱述<sub>一</sub>。

〔全集〕<sub>二</sub>一五三<sub>一</sub>

とあるが、最後の一句は恐らく傳教の加筆であらうが、果して然りとすれば矢張自然智を讃したもので、傳教は道瑯を以て禪戒相承の師としたことは明かである。

## 二、自然智道瑯

更に傳教が道瑯を以て自然智と讃せる内容に明にするならば、光定の「一心戒文」に依るべきである。いふ迄もなく「一心戒文」は傳教の圓頓戒壇建立の顛末を記したもので、文中傳教一期の弘通を指して「大乘三學」「一乘三學」「天台三學」「自性清淨三學」等〔全集別卷〕<sub>二</sub>一七二<sub>一</sub>と述べ、若し道瑯の傳戒に就ては

天台戒体來<sub>二</sub>於海東<sub>一</sub>、久在<sub>二</sub>日本<sub>一</sub>隱<sub>二</sub>於家庭<sub>一</sub>、〔同上〕<sub>二</sub>三二<sub>一</sub>  
と記し、禪法に就ては

彼二十八師菩提達磨、持<sub>二</sub>一乘戒<sub>一</sub>遊<sub>二</sub>來漢魏<sub>一</sub>。(同上)

と禪戒一致の解をなし、随つて傳教の一乘戒の相承に就ては

聖與<sub>二</sub>之聖<sub>一</sub>交<sub>レ</sub>跡利生、一乘之戒流<sub>二</sub>於山門<sub>一</sub>、先師傳戒在<sub>二</sub>聖後<sub>一</sub>、〔同上〕<sub>二</sub>三二<sub>一</sub>

と達磨道瑯の所承とせること、全く「血脈譜」に合致し、又これ恐らく道瑯の「注梵網」に由來するものである。

道璿の「注梵網」三卷は早く散逸して現存しないが、傳教は「顯戒論」中に『南唐註經』として、大小兩戒の四義分別の一段（『全集』一<sup>四三</sup>）の引用し、光定は「一心戒文」下に虚空不動の三學の文を引用して居るが、後者は道璿の三學一元に立つ根本思想と見ることが出来る。

道璿は「梵網」を註してその下卷の『我已百劫修行是心地一爲盧遮那』（『正藏』二四〇〇）の文を釋して

修行者天台師說修一切法、不生不滅不常不斷不異不來不常住一相、如虚空言語同斷、自性清淨是名修行、如是行人於自性清淨心中、不犯一切戒是即虚空不動戒、又於自性清淨心安住不動如須彌山、是則虚空不動定、又於自性清淨心中通達一切法、無碍自在即是虚空不動慧、如是等戒定慧名盧遮那佛。

（『全集別卷』三三<sup>三四</sup>）

と釋して居るが、光定は「一心戒文」にかゝる虚空不動の三學の思想系統を明にして

亦知如下天平勝實年中、共鑿眞和上來法進僧都註梵網經文上、亦同璿和上戒文、亦同國清百錄文、智者普禮自性三學、延曆年中比叡大師將來錄文、有智之人留自古書一耳、（同上<sup>三四</sup>）

と道璿の虚空不動の三學は、正しく智者「國清百錄」の普禮法に由來すとなし、「百錄」は「台州錄」（『全集』四〇六<sup>九</sup>）に依るに傳教歸朝の折、將來せることを指摘し、三學一元の思想は天台道璿法進傳教とその相承を明かにし、更に光定は「戒文」に「鑿眞名記傳」の天台南岳に於ける法華代講の靈山同聽朗然大悟の下なる『南岳思禪師之菩薩戒弟子智者師』（別卷<sup>三三</sup>）の文を引いて、天台の菩薩大戒は南岳相承なる旨を明にしたのである。これ圓戒のみならず天台の圓の三學が、南岳に由來することを證するものである。且つ傳教の圓戒は圓の三學に立脚することは、矢張「一心戒文」に

「寂澄法師入<sub>ニ</sub>於唐<sub>一</sub>而受<sub>ニ</sub>三學旨<sub>一</sub>、彼事不<sub>レ</sub>成者不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>傳戒。(別卷)。」  
 とも、亦『今天台一門已立<sub>ニ</sub>圓宗大乘三學<sub>一</sub>、流傳未<sub>レ</sub>周』(同上)等とあるに徴して明かである。而して叡山の圓頓戒壇勅許は全く光定の致す所であつた。

併し道瑯の三學一元は然らんも、若し梵網の解は撰揚の智周の「戒疏」にも依れることは、凝然の「傳通緣起」には

道瑯律師註<sub>ニ</sub>梵網經<sub>一</sub>、全依<sub>ニ</sub>撰揚弘<sub>ニ</sub>之遐邇<sub>一</sub>。(佛全)一〇一<sub>二</sub>

と述べ、又「律宗瓊鑑章」には

法相人用<sub>ニ</sub>撰揚智周作<sub>ニ</sub>五卷疏<sub>一</sub>、非<sub>ニ</sub>相宗義<sub>一</sub>附<sub>ニ</sub>順天台<sub>一</sub>、兩宗未<sub>レ</sub>如翫習依學、而道瑯師依<sub>レ</sub>此作<sub>レ</sub>註。(佛全)一〇五<sub>二</sub>

とあるが、道瑯は在唐中定賓よりの傳律は見ゆるが、智周の疏は或は來朝後鑒眞將來のものに依つたのかも知れぬ。道瑯の「註疏」は現存せぬ故に其の内容を比較することは出来ぬが、傳教が「顯戒論」前掲の文の次に「撰揚智周亦同<sub>ニ</sub>此說<sub>一</sub>」(全集)一<sub>二</sub>とあるに依て知るべきである。智周の「菩薩戒疏」も五卷中一、三、五の三卷を逸し、現に「續藏」(六〇套二冊)に二、四の兩卷が收められて居るが、我が永超の「東域傳燈目錄」下には「依<sub>ニ</sub>天台撰<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>」<sub>二</sub>といひ、又智周の疏に「依<sub>ニ</sub>天台師作六位釋<sub>ニ</sub>戒光<sub>一</sub>」(同上)と天台の六即に依て、梵網の第一義戒光を釋せるに依れば、智周又既に天台に依ることは明かである、故に傳教は入唐前道瑯智周を通じて、三學一元に依る天台圓戒の相承があつたのである。

因に一言すべきは傳教の『授菩薩戒儀』に、智證が仁和三年に朱筆を以て謗註せるものが傳へられて居るが、其の

第七受戒の下の三聚淨の名の註に『虚空不動戒、定、惠』とあることである。(『全集』四<sup>九五</sup>、『佛全』二六<sup>〇五三</sup>、『正藏』七四<sup>六</sup>註<sup>以</sup>)此の文はいふ迄もなく道璿の「註梵網」に依て智證が註したものであらう。然るに「傳教大師全集」(四<sup>三〇</sup>)冠註、(並に「佛教全書」の智證の裏書(二六<sup>六三三</sup>)は、共に『大唐和上叡受菩薩戒文云』とあるが、此叡は道璿の璿の誤なることは、「大正藏經」の裏書の分には正しく璿(七四<sup>六三三</sup>)と作るに依て明かである。随つて道璿の疏は智證の頃には存在したことが明である。此の智證の註の中には所謂兩岳の「授菩薩戒儀」が、傳教本の最後に引用せらるゝ、「正藏」七四<sup>六三三</sup>)事も注意すべきである。

### 三、行表と鑒眞隨來

若し道璿の弟子大安寺の行表(七<sup>七三</sup>)に就ては、傳教禪法の師で「釋書」十六には『嘗受道璿禪師禪要二付上足竝證』(『佛全』一〇一<sup>六六</sup>)とあり、若し「本朝高僧傳」四には『博通經律天平十五年就唐道璿重受戒法』(『佛全』一〇二<sup>九五</sup>)とある、故に道璿は傳教禪戒相承の師である。而し諸傳等しく行表の道璿よりの傳法を以て、七十三歳となし傳文『璿曰老比丘爲法忘身』と述べ、「南都高僧傳」の如きは延暦十六年百四十歳を以て、大安寺の西唐院に入寂(『佛全』一〇一<sup>五五</sup>)とするのである。然るに「本朝高僧傳」の記者師蠻は、延暦十三年の「房主帳」を引いて、『今說示寂歲臘可勒』とある如く、これ全く延暦十三年の房主帳の文の

傳燈大法師行表年七十三臘五十二。以天平十五年三月二十九日於興福寺北倉院。(『全集』二<sup>七三</sup>)  
と二段に分つべきを、「内證血脉」の前文に『奉天平十三年十二月十四日勅、於國宮中七百七十三人例得度、師主大安寺唐法師道璿』と記し、次に延暦十三年の房主帳の文を引き、最後に

和尚延曆十六年春秋七十有餘、遷<sub>ニ</sub>化於大安寺西唐院<sub>一</sub>。〔全集<sub>二</sub>二八二<sub>一</sub>〕とあるに依て明かなる如く、七十三は延曆十三年の年齢である。故に行表は天平十五年廿二歳で受戒し、延曆十六年七十六歳の遷化とすべきである。若し傳教の相承に就ては「血脉譜」には

謹案<sub>前</sub>澄度緣云師主左京大安寺傳燈法師位行表<sub>已上度、緣文</sub>、其祖道璿和尚自<sub>二</sub>大唐<sub>一</sub>持<sub>ニ</sub>來達磨法門<sub>一</sub>、傳授在<sub>ニ</sub>比叡山藏<sub>一</sub>。

(同上)

と行表より達磨禪を相承すと記し、更に入唐後達磨禪の再傳と禪林寺儵然より牛頭禪を傳へたことが記してある。隨つて行表よりは單に禪法の相承のみとなるのである。

又これより先傳律のため來朝した鑑眞和上<sub>(六八三)</sub>は、道璿と同じく直接傳教に法門の相承の無かつたことは云ふ迄もないが、來朝の折將來せる天台章疏、並に同時に來朝した弟子等の天台思想が、傳教の立教開宗並に圓頓戒運動の導火線となつたことは前述の如くである。斯かる事實を若し傳教の述作中に求むるならば、「長講法華經後分略願文」下に、法華宗の師僧として南岳天台乃至遂滿二師を擧げ

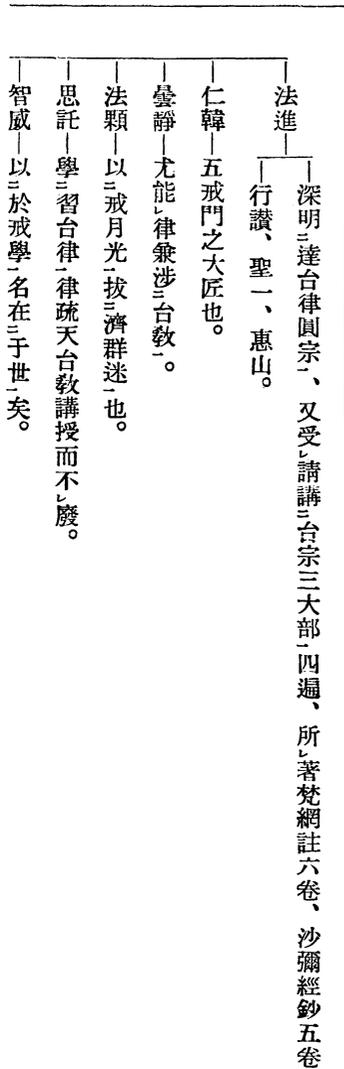
鑑眞大和尚、法進大僧都、惠雲大律師、如實唐僧都、〔全集<sub>二</sub>二六〇<sub>一</sub>〕

と四師を連ねて居るが、「東征傳」に依れば相隨弟子として『法進、曇靜、思訛、義靜、法載、法成等十四人』〔佛全<sub>一</sub>一三三九<sub>二</sub>〕と記し、「傳通緣起」には律宗の下には『竝は智解名哲皆兼<sub>ニ</sub>台宗<sub>一</sub>』と記し、天台の下には『竝天台宗學者也』〔同上<sub>一〇一六二<sub>二</sub>一</sub>〕とある如く、何れも台律に通じた人々である。更に「招提寺千歲記」に依れば法載、義靜、如實法進、思訛、仁韓、法穎、曇靜、法成、智威、靈曜、懷謙、空盛(慧雲)、慧良、慧達、慧常、慧喜、道欽、行讚、聖一、惠山の門下廿一人を數へ〔同上<sub>一〇五三三<sub>二</sub>一</sub>〕、若し「僧綱補任抄出」上には『弟子法進如實等廿四人住<sub>ニ</sub>東大寺<sub>一</sub>』〔同

上一一(五三)とあり、就れも台律に通じ、就中空盛以下は何れも來朝後進具したのである。されば「東征傳」の相隨十四人は、恐らく廿四人の誤と見るべきである。今「長講願文」に見ゆる三人中、法進は前述の如く三大部講じ梵網を註し、惠雲は讚州屋嶋寺開山空盛で、來朝後東大寺に於て進具し、後屋嶋寺を開き弘法毘尼の師であり、現に同寺に和尚の靴を留めて居る。又如實は朝鮮の人で幼より和尚の門に投じ、矢張來朝後東大寺に進具し、後下野藥師寺の戒壇に在り、天平寶字七年和尚遺囑に依て招提寺に歸り、宮中に於て桓武天皇に菩薩戒を授けた。これ殊に「願文」に列ねた所以であらう。

今試みに同時に來朝せる鑑眞門下に就て「千歲記」並に「傳律圓源解集」下に依て、順位並に所通の教學を示さば左の如くである。

日本傳戒大和尚鑑眞大僧正過海大師菩薩



- 義靜—學<sub>二</sub>天台教<sub>一</sub>—而達<sub>二</sub>其奧<sub>一</sub>。
- 法載—博圓<sub>二</sub>戒品<sub>一</sub>—深通<sub>二</sub>台教<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>台律教<sub>一</sub>—誘<sub>二</sub>迪緇侶<sub>一</sub>。
- 法成—精<sub>レ</sub>律長<sub>レ</sub>台。
- 靈曜—善<sub>レ</sub>律聲名在<sub>二</sub>當時<sub>一</sub>。
- 懷謙—精<sub>二</sub>通毘尼部<sub>一</sub>—常以<sub>二</sub>律教<sub>一</sub>—訓誨無<sub>レ</sub>替矣。
- 如寶—貫<sub>二</sub>通律教<sub>一</sub>—發<sub>二</sub>明台門<sub>一</sub>。
- 惠雲—常講<sub>二</sub>律教<sub>一</sub>、若<sub>二</sub>弘法大師<sub>一</sub>—從<sub>レ</sub>師學<sub>レ</sub>律。
- 惠良—以<sub>二</sub>律學<sub>一</sub>—有<sub>二</sub>其譽<sub>一</sub>也。
- 惠達—能圓<sub>二</sub>戒品<sub>一</sub>。
- 惠常—尤長<sub>二</sub>戒門<sub>一</sub>。
- 惠喜—戒學尤善。
- 道欽—定登<sub>二</sub>大戒<sub>一</sub>。

右の廿一人中法進、思託、義靜、曇靜、法載、如寶の六人は天台に通じ、就中前三者はその達人であつた様である。若し法進に就ては別項に詳説する。「僧綱補任」の廿四人に對する三人は不明であるが、或は雜役隨來の人かも知れない。

#### 四、鑒眞將來の章疏

次に鑒眞將來の章疏に就て「東征傳」に依て、先づ天台部より出さば「三大部」三十卷、「四教義」十二卷、「次第禪

門」十一卷、「法華懺法」「小止觀」「六妙門」各一卷である。若し律に至つては「四分律」六十卷、法礪「四分疏」五本各十卷、光統「四分疏」百二智周「菩薩戒疏」五卷、靈溪「菩薩戒疏」二卷、定賓「節宗義記」九卷、「補釋節宗記」一卷、「戒疏」二本各一卷、亮律師「義記」二本十卷、南山「含注戒本」一卷、「行事鈔」五本、「羯磨疏」等各二本、懷素「戒本疏」四卷、大覺「批記」十四卷、「音訓」二本、法統「尼戒本」一卷及び「疏」二卷、南山「關中創開戒壇圖經」一卷等（佛全）一一三〇である。かくの如く律に於ては四分には南山、相部、東塔の三宗の章疏を始め智周靈溪の菩薩戒疏等四分梵網に亘つて粗ぼこれを傳へて居るが、これに依ても鑒眞の來朝の目的が自ら傳律にあつたことが明かである。隨つて鑒眞の律は四分梵網に亘つて居つたのであるが、就中四分の祖南山道宣は天台に私淑して居たことは、「內典錄」五に天台の著述を掲げ且つ天台を讚歎して

雙弘定慧圓照一乘、受四教於神僧、傳三觀於上德、入法華三昧證陀羅尼門、照了法華若高輝之臨幽谷、說摩訶衍似長風之遊大虛、假令文字師千郡萬數、尋彼妙辯無能窮也。（正藏）五五〇

とは章安「別傳」の意に依り天台の止觀を推賞したのである。かく道宣は天台の圓の三學一源の思想に立脚して、三觀教宗の判を唱へて律宗の獨立を宣したのである。されば「行事鈔」に和尚の意を釋して、「依此人學戒定慧故即和尚是也」（正藏）四〇三と三學立脚を示したる如く、教學の根據が天台の三學にあつたのである、故に「行事鈔」に「四分一律宗是大乘」とも、「四分宗義當大乘」とも、又は「分通大乘」（正藏）四〇三と稱する所以である。

鑒眞は相部の律を大亮より相承して居るが、定賓並に華嚴の法藏は大亮と共に滿意より相承して居る。而して鑒眞は光統、法礪、南山、懷素、大覺、大亮、定賓の四分疏を將來し、又法藏（正藏）四〇三には「菩薩戒本疏」六卷（正藏）四〇三があるが、若し「宋高僧傳」五に依れば法藏は湛然に就て「習天台止觀法華維摩等經疏」（正藏）五〇七とい

ひ、且つその著「五教章」一に

如<sub>二</sub>思禪師及智者禪師<sub>一</sub>、神異感通迹參<sub>二</sub>登位<sub>一</sub>、靈山聽法憶在<sub>二</sub>於今<sub>一</sub>。(「正藏」四五<sub>四五</sub>)

と南岳天台を賛するに徴して、今の「戒疏」は必ずしも天台に依らぬにしても、華嚴並に天台の意を以て釋したことは、「戒本疏」一に

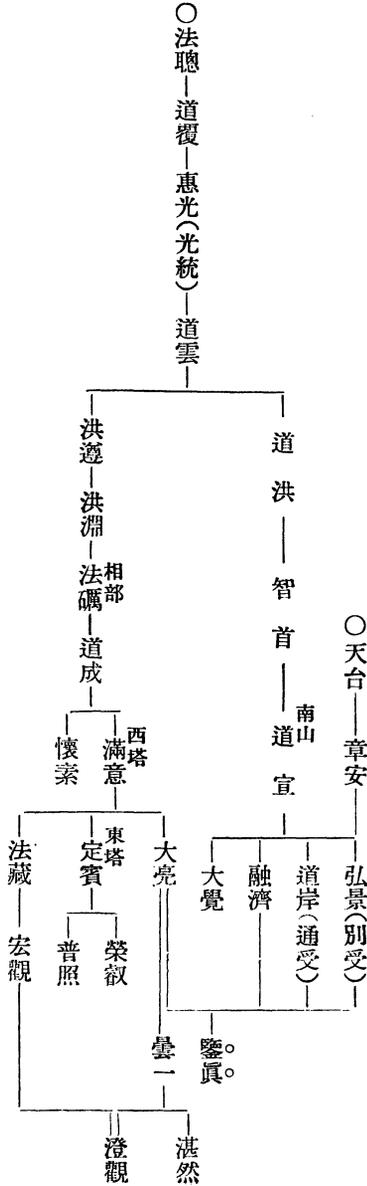
八萬威儀聖賢以<sub>レ</sub>之齊政、況乃恒沙戒品圓<sub>二</sub>三聚而統收<sub>一</sub>、塵數嚴科具<sub>二</sub>六位<sub>一</sub>該攝、既如<sub>二</sub>因陀羅網<sub>一</sub>、同而不<sub>レ</sub>同似<sub>二</sub>薩婆若海<sub>一</sub>、異而非<sub>レ</sub>異等摩尼之雨<sub>レ</sub>寶濟<sub>二</sub>洽黎元<sub>一</sub>、(「正藏」四〇<sub>三〇</sub>)

とあるは、圓の三聚といひ六位(六即)とふはこれ天台に依ることは明である。況や『以<sub>二</sub>戒具<sub>三</sub>三聚<sub>一</sub>該<sub>二</sub>於三學<sub>一</sub>』といひ、『持<sub>二</sub>此三戒<sub>一</sub>增<sub>二</sub>長三學<sub>一</sub>成<sub>二</sub>就三賢十聖等位<sub>一</sub>、究竟令<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>三德六身無碍佛果<sub>一</sub>』(同上<sub>三〇</sub>)と釋する依て愈明かである。かく當時の教學は四分も華嚴も何れも天台の影響を受けたるのみならず、鑒眞實際寺に於ける登壇受戒の師たる弘景は、天台の法孫章安の弟子である。

又凝然の「傳通緣起」下に依れば『鑒眞和尚顯<sub>二</sub>揚梵網<sub>一</sub>、彼經義途用<sub>二</sub>撲瑠疏及法鈔疏<sub>一</sub>』(「佛全」一〇一<sub>一三</sub>)とあるが、智周法鈔の「戒疏」は共に鑒眞の將來する所であり。就中智周は天台に依ることは前述の如くである。若し法鈔<sub>註</sub>は澄觀の師であり、法藏の法孫である故に、天台の影響を受けたることは勿論である。かくの如く當時の教學は孰れも、天台の影響を受けぬものはないのである。これ凝然が『鑒眞和尚宗研<sub>二</sub>天台<sub>一</sub>律弘<sub>二</sub>四分<sub>一</sub>』(「佛全」一〇一<sub>一三</sub>)と述ぶる所以である。若し上掲中靈溪の「戒疏」二卷は「奈良朝現在一切經疏目錄」には見るが、現存せざるのみならずその系統全く不明である。右の中傳教は「顯戒論」に南山「四分鈔」の外法鈔、智周「戒疏」は共に引用する所である。故に「註金剛鐱論」序に

遠仰<sup>ニ</sup>上宮太子<sup>ニ</sup>近憑<sup>ニ</sup>過海和上<sup>ニ</sup>、建<sup>ニ</sup>立此宗<sup>ニ</sup>報<sup>ニ</sup>謝彼德<sup>ニ</sup>、我國佛弟子誰忘<sup>ニ</sup>二聖恩<sup>一</sup>者哉。(全集「四」<sup>三九</sup>)  
 と讚歎する所以である。

今鑒真相承の教學の系統を圖示すれば左の如くである。



### 五、戒壇と鑒眞の授戒

傳戒のため來朝した鑒眞の戒壇並に授戒は果して如何といふに、「傳通緣起」下に依れば

所立戒場有<sup>ニ</sup>三重壇<sup>一</sup>、表<sup>ニ</sup>大乘菩薩<sup>三</sup>聚淨戒<sup>二</sup>故、於<sup>ニ</sup>第三重安<sup>三</sup>多寶塔<sup>一</sup>、塔中安<sup>ニ</sup>釋迦多寶<sup>二</sup>佛像<sup>一</sup>、表<sup>ニ</sup>一乘深妙理<sup>一</sup>  
 智冥合之相。(佛全「一〇」<sup>一</sup>)

とあるが、鑒眞は天平勝寶六年來朝と同時に、大佛殿前に戒壇を設け、時の主上を始め奉り四百四十餘人に菩薩を授

けたことは「東征傳」(「佛全」一一三三)に明かであるが、その後大佛前西に建立した東大寺の戒壇、越えて天平寶字三年の唐招提寺の戒壇、五年の下野藥師寺の戒壇、筑紫の觀世音寺の戒壇、所謂の天下の三戒壇と別に唐招提寺の戒壇が建立されたのであるが、此等の様式に就ては判然しないが、鑿眞は來朝の時道宣の「戒壇圖經」を將來したが、該經に依れば

南面三門中央大門、有五間三重高樓膜奪者、祇陀太子所造此三重者表三空門、(「續藏」二編一〇一左)とある如く、恐らく鑿眞建立の戒壇は「戒壇圖經」に依る、三重壇上に多寶塔を安するは法華經寶塔品の儀相に依つたことは明かである。而して此の多寶塔の儀相は既に支那に在ては、北魏時代に成れる大同雲岡の石窟に數個の二佛並座の刻像を見る如く、夙に法華藝術を代表せるものである。若し當時のものとしては、不空持<sup>持五</sup>の「觀智儀軌」の法華曼荼羅が同じく三重壇に多寶塔を安じて居るのである。されば唐招提寺は勿論、他の三壇戒も恐らく同一様式に依つたものであらう。斯く我が國最初の戒壇が法華の儀相に依つたことは、宗祖が我が國の法華有縁を力説せられし如く、傳教が法華に依る圓頓大戒壇建立の遠縁ともいふべき準備は、早くも鑿眞に依て爲されたのであつた。若し授戒に就ては鑿眞は勿論、「梵網」に「瓔珞」の三聚を取り込んだ菩薩三聚に依つたのであらうが、併し鑿眞以前に於ては道昭等の弘通に徴し、又「傳通緣起」に

鑑眞和尚已前諸僧皆依<sup>三</sup>瑜伽、行<sup>三</sup>聚自誓作法<sup>二</sup>(「佛全」一〇一五)

とある如く、同じく三聚ではあるが、「瓔珞」の三聚でなく瑜伽の三聚であつたのである。これ玄奘譯「瑜伽論」の攝決擇分に見ゆるもので、「菩薩地持經」十卷、「菩薩善戒經」九卷、「正藏三〇九〇」は同論の略本異出である。その本地分の菩薩地の戒品第十に

云何菩薩一切戒、謂菩薩戒略有二種<sup>一</sup>、一在家分戒、二出家分戒、是名一切戒<sup>二</sup>。又即依此在家出家二分淨戒略說三種<sup>一</sup>、一律儀戒、二攝善法戒、三饒益有情戒、律儀戒者諸菩薩所受、七衆別解脫律儀云々、(「正藏」三〇<sup>一五</sup>)と説けるものである、これ曇無讖譯の「地持經」等に依て早くより行はれ、後玄奘に依て「瑜伽」の譯出せらるゝや、瑜伽戒として行はれたものである。而して鑒真以前に於ては自誓受に依つたことは「傳通緣起」に明かである。然るに「千歲記」の思託傳に依れば

師嘗於維摩堂與賢璟<sup>一</sup>、論下和尚來朝以前、諸僧依瑜伽行三聚淨戒自誓作法、其從他受亦受三聚一成七衆戒<sup>一</sup>之義也、(「佛全」一〇五六<sup>四</sup>)

とあり、「傳通緣起」は此の文に依て、從他受の時は通受の比丘は具足戒を得と判じて居る。かく鑒真以前は瑜伽戒であり、且つ自誓從他兩様の受授があつたのであらう。

然るに天平八年道誓來朝當時より次第に「梵網」が傳はり、殊に十二年には審祥に依て金鐘寺に於て華嚴經が講ぜられ、ために次第華嚴中心の信仰が高潮し、遂に十五年にはその結果として、近江の信樂に盧舍那佛の造立が企てられ、かくて天平勝寶元年には東大寺の大佛が、觀音虛空藏の脇士と共に成就したのである。これ華嚴とその結經たる梵網が相等に、當時行はれた事實を物語るものである。何れにするも東大寺の大佛は、華嚴梵網の流行の具体的表現である。今「覺禪鈔」四「佛全」四八<sup>三五</sup>等に依れば、虛空藏菩薩の種々變化身は、これ全く觀音の三十三身より由來するものであつて、觀音は法華本門の壽量本佛の普門示現である如く、虛空藏は盧舍那佛の普門示現である。若し不空の「理趣釋」下には

佛寶者是金剛薩埵、法寶者是觀自在菩薩、僧寶者是虛空藏菩薩、此三者皆毘盧遮那心菩提心中流出(「正藏」一九六<sup>六</sup>)

と説ける如く、觀音虚空藏を盧舍那佛の脇士となすは、全く密教美術に根據することは、小野博士の前出「佛教之美術及歴史」に明かである。これ「梵網經」に盧舍那佛の自性清淨戒光たる金剛寶戒を

金剛寶戒是一切佛本源、一切菩薩本源乃至是一切衆生戒本源自性清淨。(「正藏」二四〇)

と説ける如く、奈良朝初期傳來の瑜伽戒は、道璿の來朝頃より次第に梵網となり、大佛成つて道璿が開眼の導師となるは、蓋しこれを戒より見れば瑜伽より梵網へ移るの機會となり、鑒眞の來朝に依て大佛殿前に於て終に菩薩戒の受授を見るに至つたのである。

前述の如く鑒眞來朝に依て四百四十餘人が菩薩戒を受け、靈祐賢璟等八十餘人舊戒を捨てたとあるが、然らば鑒眞以後悉く菩薩戒となつたかといふに、所謂天下の三戒壇は道宣の「圖經」に依る寶塔品の儀相に依つたが、凝然が「傳通緣起」が瑜伽に依る圓教の意を募つて

天台大師判云、彌勒以二一番四悉造地持論通華嚴已上。地持即是瑜伽菩薩地同本異譯、所釋華嚴既說別圓二教、能通地持瑜伽豈無圓教義乎。(「佛全」一〇一五)

と説けるは、これ三戒壇が維然從來の瑜伽に依る從他受に依つたことを明にするものであり、然るに招提寺は鑒眞に依て菩薩戒の受授の行はれたことは、「傳通緣起」に招提寺豐安僧正の「戒律宗旨」を引いて『此戒或名三摩耶戒、或名金剛戒、或名佛性戒』(同上)と梵網なることを證したことに依て明かである。故に鑒眞は招提寺を以て菩薩戒受授の道場となし、律は南山の四分を講じたことは、將來の律疏に徴しても明かであり、又「傳通緣起」に

講四分律及法蘊疏滿四十遍、講律鈔七十遍、講輕重儀十遍、講羯磨疏十遍、親度僧尼四萬有餘。(同上)

と述ぶるもこれがためである。若し親度の文に徴するも、道宣既に四分を義當大乘と判する故に、大乘義に依て四分の授けがあつたのであらう。當時の授戒に就ては瑜伽、四分、梵網何れも天台の圓教の意に立つ菩薩戒として授けたものであらう。併し傳教は「顯戒論」に智周、法統、明曠、元曉、道璿等の「戒疏」を引いて大乘を扶釋したが、併し「顯戒論」上に道宣の「四分律鈔」の『此四分宗義當大乘』(「正藏」四〇<sub>二六</sub>)の文、並に慈和の記を引いて明知其律未<sub>三</sub>分明、未<sub>レ</sub>足爲<sub>三</sub>正義、何執<sub>三</sub>小儀以爲<sub>三</sub>圓儀。(「全集」一七七)

と述べて、四分を小乗に攝して大乘と認めなかつた。故に「顯戒論」中には

小乘別解脱大乘別解脱、雖<sub>三</sub>其大小名同、而其義天地懸別也。乃至明知菩薩十重戒、名爲<sub>三</sub>別解脱戒。(同上<sub>二</sub>)

と兩都の分通大乘、義當大乘の弘通を以て小乘別解脱戒となし、獨り梵網を以て大乘の別解脱戒と判じたのである。

## 六、法進の戒疏と教學

前述の如く鑿真隨來の弟子は台律に通じて居つたが、就中法進は三大部を講ずること四遍、又道璿に依て梵網を註したことは「一心戒文」に依て明かである。而して法進の釋は廣く上下二卷に亘つて釋したことは、凝然の「律宗瓊鑑章」に

東大寺法進大僧都、作<sub>三</sub>梵網經註釋七卷<sub>一</sub>、全依<sub>三</sub>天台<sub>一</sub>成<sub>三</sub>立意致<sub>一</sub>、南山大師無<sub>三</sub>梵網疏<sub>一</sub>、隨<sub>三</sub>諸師解<sub>二</sub>注意用<sub>レ</sub>之。

天台賢首義寂等師、釋<sub>三</sub>偈頌已後經文<sub>一</sub>。勝莊洗銑道璿等師、自<sub>三</sub>下卷之始長行<sub>一</sub>釋<sub>レ</sub>之。大賢善珠法進等師、通釋<sub>三</sub>上下二卷<sub>一</sub>。(「佛全」一〇五<sub>二七</sub>)

とあるに依て明かである。既に煙滅してその内容全く知り得ないが、道璿に依り殊に天台に依つたらうと思はれること

は、幸現存する法進の「沙彌十戒威儀經疏」五卷の釋に依て知ることが出来る。

若し「威儀經疏」は善俊の愆愆に依つて製疏し、殊に唐より隨來せる慧山、聖一、行讚のために、天平寶字四年十月二十三日より十二月十七日に亘つて國昌寺に於て之を講じ、翌年春疏したものである。即ち卷首に

此經義隱披讀猶迷、遂於天平寶字五年二月一日、忽見大安寺僧善俊令進製於義疏。  
とあり、又卷尾には

天平寶字五年二月一日起首撰此經疏、至四月十五日都畢、有遇此本幸垂隨喜請廣傳焉（日本大藏經）小乘律、一三六四

とあるに依て明かである。善俊は「東征傳」の末に依れば、東大寺に於て鑒眞並に下門に代つて律の諸部を講じ、後思託等の請に依て一品新田部親王の舊宅地に在て律を講じ、後之を寺となしたのが唐招提寺である。併し師は鑒眞隨來ではなく恐らく道躋隨來の人であらう。

更に今の疏の内容に就ては、四分、五分、善見、僧祇等の四律を始め、梵網婆沙等をも引用し、若し經としては法華、華嚴、般若、涅槃、維摩、仁王、金光明等に亘り、論としては起信、大論、淨土論等廣く大乘の三藏に亘つて居る。第一卷の初に先づ三歸五戒を釋し、次で正しく十戒を釋するに當つて、華嚴の善財、法華の龍女を引いて「玉不琢不成器、人不學不知道」（同上三六）と述べ、道は修行に依てのみ達せらる所以を力説し、五種の方便に次ぎ禪法に就て

修定者名有漏定、不從戒定而修業者名有漏慧、並不能斷除煩惱等三障也。故經云偏學禪定福德、不修智慧者名之曰愚、偏學智慧不修禪定福德名之爲狂。狂愚之失未能出於生死、何故疾證無上極

果。(同上)

と述べたのは、天台の止觀を推賞したのであるが、戒經疏に於て定慧を推賞したことは、これ自ら三學一元に立つことを物語るものである。而して戒の上に立つて定慧の孰れを偏修するも狂愚となし、生死の大海を出づる能はずと説いて居る、これに依て鑒眞門下の天台學の内容を彷彿し得るのである。

此に於てか道璿乃至鑒眞門下の天台學が、如何に傳敎の教學に影響したかは、傳敎が叡山開闢の「願文」に於て出家の願業を縷説し終つて、『無<sub>レ</sub>因得<sub>レ</sub>果、無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>是處、無<sub>レ</sub>善免<sub>レ</sub>惡、無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>是處』と述べ、更に「未曾有因緣經」〔「正藏」一七五七〕を引き

明哉善惡因果、誰有慙人不<sub>レ</sub>信<sub>レ</sub>此典、然則知<sub>レ</sub>苦因而不<sub>レ</sub>畏<sub>レ</sub>苦果、釋尊遮<sub>レ</sub>闍提、得<sub>レ</sub>人身徒不<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>善業、聖敎嘖<sub>レ</sub>空手、於是愚中極愚、狂中極狂、塵秃有情、底下寂澄、上違<sub>レ</sub>於諸佛、中背<sub>レ</sub>於皇法、下闕<sub>レ</sub>於孝禮、謹隨<sub>レ</sub>迷狂之心、發<sub>レ</sub>二三之願、以<sub>レ</sub>無所得<sub>レ</sub>而爲<sub>レ</sub>方便、爲<sub>レ</sub>無上第一義發<sub>レ</sub>金剛不壞不退心願。(「全集」一)

と述べたのは、正しく法進の「威儀經疏」の文に依つたことは、容易に觀取し得るのである。且つ法進の「疏」には前引の連文に、「止觀」の二十五方便を抄録し、最後に三調、四魔、三鬼、十魔の對法を評説し、最後に正邪二相に約して修禪の法を叙し

若有<sub>レ</sub>凡夫菩薩、欲<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>一念中具<sub>レ</sub>足一切佛法者、可<sub>レ</sub>修<sub>レ</sub>中道正觀、云何修<sub>レ</sub>正觀、若能諦<sub>レ</sub>觀心性、非<sub>レ</sub>空非<sub>レ</sub>假而不<sub>レ</sub>壞<sub>レ</sub>空假之法。若能如<sub>レ</sub>是照了則於<sub>レ</sub>心性通<sub>レ</sub>達中道圓照二諦、若於<sub>レ</sub>自心中見<sub>レ</sub>中道二諦、即見<sub>レ</sub>一切諸法中道二諦、亦不<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>中道二諦、以<sub>レ</sub>決定性不可得<sub>レ</sub>故。(同上三五)

と「中論」の偈を引き、『當知中道正觀即是佛眼即是一切種智』と述べ、三軌六根淨首楞嚴三昧と縱橫無盡に定慧の二

法に約して説いて居るが、これ止觀の中道觀に外ならぬのである。

若し最後第五卷には天台智者の略歴を出し、就中「吉藏屈身猶如<sub>レ</sub>肉橋」の文を見るは、恐らく「國清百錄」等に依て法進の指摘せる所であらう。而してこれが傳教の「秀句」下の「嘉祥大德歸伏稱心」の文（「全集」二三五）となり、終には宗祖の『七年肉橋』<sup>四七九</sup><sub>四七六</sub>の説となつたのである。更に同卷に鑒真將來の天台教藉を掲げたるは、これ青年時代の傳教の求知心を如何に刺戟せしや知るべきである。さればには「一心戒文」中には

大日本人未<sub>レ</sub>入唐<sub>二</sub>前、披<sub>二</sub>一切經<sub>一</sub>、禪和尚經覽<sub>二</sub>於叡岳<sub>一</sub>、進和上經檢<sub>二</sub>於東嶺<sub>一</sub>、入唐之日登<sub>二</sub>於天台智者山門<sub>一</sub>、得<sub>二</sub>佛戒文<sub>一</sub>、三種之文來<sub>二</sub>於山家<sub>一</sub>、戒体留<sub>二</sub>山迹<sub>一</sub>、戒珠研<sub>二</sub>場戒<sub>一</sub>、（「全集」別卷二八）

と述べてたるは全く過言ではなからう。最後に戒に就ては此の戒經は元來沙彌十戒の威儀を説いたものであるが、第三卷の初に

三歸五戒不<sub>レ</sub>失<sub>二</sub>人身<sub>一</sub>、八戒十善得<sub>二</sub>生天上<sub>一</sub>、比丘二百五十戒三千威儀六萬細行、修<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>犯得<sub>二</sub>阿羅漢果<sub>一</sub>。比丘尼五百戒六萬威儀十二萬細行、修<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>犯得<sub>二</sub>生非想非々想天<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>彼天<sub>一</sub>終歸<sub>二</sub>墮落<sub>一</sub>、若受<sub>二</sub>菩薩戒<sub>一</sub>者、最勝妙得<sub>二</sub>成佛身<sub>一</sub>。（「日本大藏經」同上<sub>二九</sub>）

とあるに依れば、鑒真來朝以前乃至當時尙ほ南都東大寺の戒壇等の授戒が、維然として瑜伽の七衆通受の三聚に依つて居り、之に對して道禱、鑒真一派の梵網に依る佛果證得の菩薩戒の授受があつたことは察せられるのである。隨つて法進が道禱に依て梵網を註したことは、道禱と同じく三學一元の思想に立つは勿論、南都の瑜伽乃至四分の義當大乘戒に對して、傳教に圓頓戒の獨立の運動を起さしむべき素地を作つたともいふべきである。

如上の論述に依て三學一源を根柢とする天台教學が、傳教をして圓頓戒獨立の運動を餘儀なく促した所以を觀取す

べきである。

### 第三 傳教の圓頓戒

#### 一、顯戒論の内容

最後に傳教の圓頓戒に就て述ぶるに當つて、その實際的運動は且く措き、その思想的方面に就て之を見るに由來傳教の教學の内容たる圓禪戒密の所謂四個傳法なるものは、これ漫然と重なる佛教學を配列したのではなく、必ずや一定の理想の下に是等を止揚したものである。即ち四個の中圓禪戒の三個は、その内容自ら慧定戒の三學であつて此の三學に依て大乘佛教を統一せんとしたのが、傳教の立教開宗の目的であつた。而して此の思想は南岳、天台以來の教學の根柢であり、支那に於ては定慧の止觀宗であつた天台が、道宣に依る戒學獨立以來、此の思想と結び附いて終に道璿、鑒眞、法進等に依て、從來乘急戒緩の天台學をして、正しく三學一元に結成せんとしたのが、傳教の立教の目的となり、圓頓戒獨立の運動となつたのである。若し密教に至つては歸朝の途次の相傳であり、空海の眞言に對する防衛的手段であつた。故に眞言はその儘後に殘され、慈覺、安然等の顯密融合運動となり、後世宗祖が之を指して顯密雜亂と評せるも、全くこれを意味するのである。

隨つて傳教に課せられた當面の運動は、三學中比較的顧みられなかつた戒を盛り立て、定慧の止觀に伍せしめ以て三學一の法華圓教宗を樹立し、以て大政に翼賛し奉らんとせられたのである。隨つて圓頓戒壇建立の運動はこれに外ならなかつた故に「顯戒論」下に

先年新加年々兩々也、其新加旨者其專爲傳持圓頓戒定慧也。然則圓宗三學不絶本朝也。〔全集〕一、<sup>四〇</sup>

と述べ、更に最後に

一乗出家年々雙、圓教三學未具足、二學雖芽未戒學、是以觸鱗請圓戒、(同上七八)  
と述ぶるに徴して、その意よく明かである。されば傳教の弘通はこれを天台の定慧に對すれば、圓頓戒を以てその特長といふべきである。これまた宗祖が常に天台は圓定圓慧を弘め、傳教は未弘の圓戒を弘むと宣はるゝ所以である。

然らば傳教の圓戒は果して如何といふに、今「顯戒論」に之を見るに法華、觀普賢、涅槃、維摩、仁王等の諸大乘經、律は梵網、論は大論、宗輪論等諸論、文句、止觀を始め吉藏、慈恩、道榮等の法華の疏、その他仁王、涅槃の疏西域記、寄歸傳、鑒真傳、南山、慈和の四分の疏、天台、寂徳(義寂)大賢、法銑、明曠、智周、元曉、南唐(道璿)の八梵網疏を引用して居るが、是等の引證の經疏に徴して傳教の圓戒の内容自ら知ることが出来る。若し傳教の圓戒はその相承に依れば、「四個血脉」には道邃相承といふも、「顯戒論」に依れば「依法華經不依小乘律」(「全集」一七三)と述べ、更に弘仁十年の「回小向大式」に依れば大乘戒を釋して、「依普賢經請三師證等」(「全集」一七三)と釋して、「普賢觀經」の釋迦和上、文殊阿闍梨、彌勒教授、十方佛證師、十方菩薩同學の不現前の五師授戒式に依ることを明にし、更に

菩薩國寶載法華經、乃至佛道稱菩薩、俗道號君子、其戒廣大真俗一貫、故法華經列三種菩薩、(「全集」一七三)  
と在家出家の菩薩をして、眞俗一貫の理想の下に國民をして悉く菩薩即君子たらしめ、以て鎮護國家の翼賛に擬せられたのである。これ正しく法華の十界皆成の精神に立脚したものであり、且つ『圓教菩薩別有威儀』(同上三三)と述ぶるも、若し「普賢觀」の不現前の五師授戒以外には、別に何等の威儀を見出さないものである。加之次下に至つて

新宗所傳梵網圓戒、分備圓五德、波引一圓根、當知圓戒圓臘圓禪圓慧、非天台釋難可傳說也。(同上<sup>三</sup>)  
と釋するに依れば、天台の三學一元の釋に依る梵網圓戒を以て、法華の圓戒の内容としたと見なければならぬ。随つて此處に於ては三學一元思想を以て法華の思想と見なければならぬ。然らば此の思想は遠く南岳に發することは、「顯戒論」の最初の頌に

歸命南岳天台等、傳戒師々諸聖衆、

我今顯發一乘戒、利樂一切諸有情、

爲開圓戒造此論。仰願常住深三寶、

冥護顯護無妨難、傳戒護國盡後際、(同上<sup>二</sup>)

とは三學一元の法華一乘戒を以て永遠に護國の忠精を盡す意が躍如と拜せられる。傳戒の諸聖衆とは道璜、鑒眞、法進等を指したものである。

## 二、佛住一乘戒

かく傳教は南岳天台に依て法華一乘戒を顯揚し、南都の大小兼學の律を小乘律として排斥したのである。然るに「顯戒論」には又

妙法一乘眞實教、歸命佛性一實戒、十重四十八輕戒。(同上<sup>二五</sup>)

とも述ぶるが、これは傳教が法華に依て小乘律に依らぬとの語には背かぬが、又梵網の菩薩戒に依ることは明かである。併し由來法華は佛乘教であり、般若、華嚴等は菩薩乘教であり、梵網は華嚴の結經であるから勿論菩薩乘經に屬し、

隨つてその戒は菩薩戒である。故に若し傳教が法華に依るとすれば、正しく法華の一乘戒即ち佛戒たる、「方便品」の十如實相の理戒又は「法師品」の三軌戒、「安樂行品」の四安樂行戒、若しくは「普賢品」の四法戒等の事戒に依るべきである。然るに事戒は梵網の十重四十八輕戒に依ることは、傳教既に明瞭の「戒疏」に依る故に、明瞭が既に梵網を判じて『別圓教輕重頓制菩薩戒』といひつゝ、理戒は法華の十如實相に依る圓の三學に立ちて圓頓菩薩戒とせると同意である。隨つて傳教の圓戒は台荊より一步出でたる明瞭に立脚するものである。

されば「顯戒論」に依れば『開示佛戒別解脱戒明據』二十の下に「梵網經」下の金剛寶戒の典據たる

是一切佛本源、一切菩薩本源佛性種子、一切衆生皆有佛性、一切意識色心是情是心皆入佛性戒中、當々常有因故有當々常住法身、乃至是一切衆生戒本源自性清淨。又云一切有心者、皆應攝佛戒、衆生受佛戒、即入諸佛位、位同大覺已、眞是諸佛子。(「正藏」二四〇)

の文を引き、又戒光を釋して

非色非心、非有非無、非因果法、諸佛之本源、行菩薩道之根本、是故大衆諸佛子之根本。(同上)

との文に依て、梵網は『不同藏通』と判じ、更に

夫此十重戒雖先傳授、然但有其名、未傳其義、何以得知未傳其義乎。然未解圓義猶共小儀故。(全集一九九)

と梵網の菩薩戒を佛性一乘戒と解し、佛性は成佛の佛果に對して佛因なる故に、爾前の菩薩戒たる梵網を佛因戒となし、明瞭が「戒疏」に法華を唯圓一乘と判するに對して、梵網の菩薩戒を法華迹門の佛因と解したのであるが、これは法華の實相に依る天台の三學一元の圓教に依てのみ解し得るのである。さればにや傳教は梵網を以て大乘別解脱戒

〔全集〕一九〕と解し、法華の迹門の實相を以て之の戒法とし、梵網の十重四十八輕戒を戒相と解したのである。故に傳教の圓頓戒は佛性即ち佛因の義に約して、梵網の菩薩戒を事戒迹門の實相を理戒とした、所謂今昔二圓無殊の重に於ける、正依法華の圓頓大戒と解すべきである。随つて傳教の圓頓戒は明瞭が『三聚互融、三觀三身相即』〔正藏〕四〇四五と瓔珞の三聚と融會せる、當時一般に行はれた三聚攝取の點は不明であるが、唯梵網に依る『菩薩十重戒名爲別解脱戒』〔全集〕二五〕とする圓頓菩薩戒で未だ純法華圓頓佛戒とはなり得なかつたのである。

翻つて天台の法華の行法は如何といふに、天台は「文句」に『正行六度』〔正藏〕三四七〕と説ける如く、般若、華嚴等の菩薩乗教と同じく六度を法華の正行と解し、三學に依るも定慧の止觀を以てその行法としたのである。然るにその後道宣等に依て戒學が佛教學の一面を占むるに至つて、從來閑却された戒の一面を梵網に依て擴充し、南岳以來教學の根柢をなした圓の三學を法華因分の程度まで充實したのが、傳教に依てなされた圓頓戒壇建立運動と見るべきである。かくて圓の三學は具足したにもせよ、天台の實相に立つ三學一元の思想は維然として菩薩乗教當分の三學なることは、傳教が梵網當分の菩薩戒を以て法華迹門の圓戒と同義と解せることに依て明かである。要するに天台に在ては佛乘教たる法華を、菩薩乗教として解したことは天台傳教同一轍である。これ宗祖が天台の理觀を指して常に像法過時の行法と貶する所以である。

若しそれ傳教の圓頓戒の思想に就ては、古來僞作と稱せらる「學生式問答」並に「金剛戒体秘決」等に依て補足すべきである。兩書は共に正依法華傍依梵網（〔全集〕三九七、四一九）と判じ、法華に依る圓戒が相當高潮せられて居るが「秘決」に見ゆる本覺法門の高潮は、安然の「普通廣釋」等に見ゆる密教三摩耶戒に刺戟せられた結果で、天台としての迹門の圓戒は恐らく完全にその發達完成を見なかつたものといふことが出来る。

（一六、九、二五）